

『新生』から『夜明け前』へ（5）

De “Shinsei” à “Yoakemahe”
— sur les oeuvres de SHIMAZAKI Touson —

佐々木 涇
SASAKI Thoru

III-1

島崎藤村がフランスから帰国したのが大正五年（1916）七月で、これより二年後に『新生』を、すでに記したように「朝日新聞」に連載形式で書き始めた。途中に一時中断があったにせよ、完結したのはその翌年、大正八年（1919）である。そして次の長篇小説『夜明け前』を「中央公論」に連載開始したのが昭和四年（1929）四月である。つまり、『新生』の脱稿後から『夜明け前』発表までに十年がある。その間の作家活動として多くの評論や紀行文の執筆の他に短篇小説の11点を発表している。それらのうち藤村、もしくは藤村の近親者がモデルとなっていると思われるものは、『ある女の生涯』（大正十年）、『子に送る手紙』（大正十三年）、『のび支度』（大正十四年）、『熱海土産』（同年）、『嵐』（大正十五年）、『分配』（昭和二年）の6点である。これらの他は作者が手紙で亡き人に語りかける形式をとっている『貧しい理學士（『齋藤先生』改題)』（大正九年）、女性を主人公としたものが4点、『涙』（大正九年）、『三人』（大正十三年）、『明日』（大正十四年）、『食堂』（大正十五年）となっている。（註1）

この時期に書かれたいずれの作品も、『新生』以前の、つまり、小諸時代以降の自然主義作家として書いた短篇の傾向とは異なる様相を見せている。

まず、その特徴のひとつとして、恋愛ものが数少ない点である。否、ないと言って良いだろう。『新生』以前には少なくとも11点の短篇が男女間の心のもつれや性にまつわるものが作品のテーマとなっている。ところが『新生』以後の作品では、唯一恋愛らしきものと言えるのは『明日』である。

従兄妹の関係にありながら、許婚の関係でもある隼太とおせんが親同志の仲違いにも関わらず、おせんの主導で自分たちの気持を押し通そうとする。だが、おせんは隼太の熱意が冷めたことを知って自立を決意し、肉親たちとも決別する。そこには男が原因となる人生の浮き沈みに出会い、振り回されるつもりのない女性の姿が浮んでくる。ただし読者が知るのは、隼太宛ての手紙の中で書き記されたおせんの決意でしかないが。この作品は、繰り返すが、純粋な恋愛小説とは言えない。おせんという女性のその後はどうなるか不明であるが、自立に至る直前の姿が描かれている。

『新生』を経た作家藤村にとって、打ちひしがれ、未来に展望を見出し得ない女性を描き出すことは不可能であったに違いない。この『明日』は大正十四年（1925）五月に創刊された「婦人の國」の創刊号と第二号に連載された作品である。雑誌名からして女性向けであろう。従って女性の前向きに生きる姿を否定する作品であってはならない。ましてや、これより三年前、藤村自ら婦人向けの雑誌「處女地」を主宰している（註2）。この点からしても未来に展望なき女性を描くことは藤村自身の意に反することになる。

例えば、この「處女地」であるが、その創刊趣意書には次のような文章がある。先ずロマン・ロランの言葉を引用してから趣意が述べられている。

「『わたしたちの周囲にある空気は重い、
窓を開けはなて、
自由な空気をそゝぎ入れよ。』

（ロマン・ロラン）

来るべき時代の婦人のためにと思ふものが集りまして、未熟ながらその支度を始めました。

『處女地』に集まるものは、文藝に向はうとするものもあり、哲學や宗教に行かうとするものもあり、教育に従事するものもありまして、志すところは必ずしも一様ではありません。しかし、互に取る道こそ異なれ、同じ婦人の眼ざめを期待します。」（註3）

姪との関係が生じた頃は女性への復讐故に結婚すまいと考えていたが、この時点に至っては全く異なっており、フェミニズムを目指していると言ってよい。だが作家として小説の中で新しい女性を描くにしても、『三人』という作品では生き生きと働く姿を描いてはいない。雑誌の仕事をしていた實子が温泉地に保養に来る。その地で女学校に教師として勤務する得子と桃子、それに實子の三人は東京で共に学んだ同じ学校の卒業生である。彼女たちの話題にあがるのは友人たちの動向であり、今後結婚するか否かである。しかしそれぞれ誰も結論を出さない。ところが小諸時代に書かれた短篇『老嬢』（註4）では逆である。男を信じない女教師が愛を拒絶し行方をくらます。次に友人の前に姿を現したときには子供を産み、狂ってしまう。学を身につけた女性の不運を描いたものである。女性は結婚しなければ、不運であり、ひとりでは生きていけないと解することもできるし、男に愛されることを望む女性こそが良しとされることも解することができる。藤村夫婦が結婚四年目を迎えた時である。先に触れたように妻に不信を抱いていた時期であることを考えれば、上に記したような解釈は成立する。だが今や、『新生』によって異性に対する視点が変わったが故に『老嬢』のような作品は書けないと言えよう。

また藤村自身の犯した行為が故に婚期を逸した姪こま子のためにも、結婚をした女性の運・不運を小説の中に描き出すわけにもいかないであろう。むしろ、結婚せずとも、女性ひとりで生きるがために、つまり新しい女として生きるがために、激励するかのような作品とする必要があったかもしれない。

同じ女性を描くにしても過去を振り返ることができる、つまりそれ相応の人生を生きだした女性たちを主人公にした場合はどうか。藤村が悲しい人生を叙述する『ある女の生涯』では性の暗さは強調

されていないが、ひとつの人生を感慨深げに見ている。男と家に振り回された人生であり、精神病を病んで異郷の地で死んでしまう。『涙』にしても人生を振り返っても良いような年齢になった女性に仕える下女（同様に若くはない）の視点で書かれたものであるが、多様な人生に理解を示す女主人のことばに下女は涙する。そして関東大震災を期に食堂経営を息子にゆずる女性が描かれた『食堂』。これらいずれの作品を見ても、様々な辛苦があろうとも、とにかく生きた人達を藤村は否定することなく受け入れている。

小諸時代の同僚を描いた『貧しい理學士』にしても、否定するどころか尊敬の念を持ちながら語りかける。違う同僚を描いた『水彩畫家』（註5）は、小諸時代の作品であるが、当時の藤村自らの姿が投影されているが故に、苦しみ満ちている。夫婦間の不信が描かれていることは先に述べたが、克服の仕方について掘り下げの程度が不足している。この問題に苦慮している若い作者の姿が浮んでくる。ところが『貧しい理學士』では過去が語られながら、静かな落ち着きのうちに人生を見つめているものとなっている。

すなわちもうひとつの特徴が、上に述べてきたように精神的な苦しみを直載にテーマとして扱っていない点である。言わば、余裕を持ちながら様々な人生を見つめようとしているのである。

この視線は藤村の子供たちにも及ぶ。従って、彼らの未来に展望を持っていないにしても、子供たちに対する思いを描いた一連の作品に、わずかでも触れておく必要がある。『のび支度』では一人前の女性の体となるべく娘の初潮を迎えても性にまつわる出来ごとを想定することはない。母親のいない家庭での父親の思いが描かれている。思いがけず手に入った大金を子供たちのために用意立てる父親の姿が描かれている『分配』。そして子供たちと共にあった自らの生活を描き出しているが、その内容は表題からは到底予想だにできない作品『嵐』がある。

III-2

この『嵐』は大正十五年（1926）9月1日付けの雑誌「改造」に掲載されたもので、後に『嵐』

と題された短篇小説集に所収されて発行された(註6)。なお先に挙げた『涙』と『分配』は所収されていない。さらに「定本版藤村文庫」の第八篇『春待つ宿』と題された小説集に所収されて再度出版された(註7)。この小説集に「附記」が付されている。

「この二部の小説集は大正九年から昭和二年の頃へかけて、およそ七年ばかりの間に書いたもの。七年といへば自分等の生涯に取りさう短い月日でもない。それより以前にわたしは航海記「海へ」を書き、長篇『寢覺』をも書き終り、三年の佛蘭西の旅を振り返って見て『佛蘭西紀行』(別名、エトランゼエ)に着手する頃は歸朝後の自分の心もだいぶ落ち着いて来た。一方から言へば當時わたしは母なき四人の子供等が養育のため多くの時と精力とを費してゐた頃ではあつたが、自分一個としてはそれまでの激しい精神の動搖も沈まり、殊に麻布飯倉の方に移り住んでからは大に心を安んずることが出来て、あの谷蔭のやうな飯倉の舊居で先づ筆を執つたのが『貧しき理學士』である。

……(略)……

『嵐』、これは大正十五年になって九月號の「改造」誌上に発表した。當時わたしは五十五歳。自分等の先輩や知人の中には最早故人となつた人達もすくなくなく、折柄の初秋の風も身にしみ、周圍をふりかえつて見る度に深省を發せしめるやうなことばかり。その自分の心持は作の中にもあらはれてゐるかと思ふ。意外な反響を世間に喚び起こしたのもまたこの作であつたが、一つには文學上の作品に注意する男女の讀者の範圍が日に月に擴大されて行つた證據とも言つて見ることが出来よう。

……(略)……

たゞこの作、『嵐』が世界大戦後の新しくあつたやうな空気の中で、「養子風塵間」と昔の人の詩の句にあるやうな心持で書いたものであるといふにとどめる。」(註8)

どのような精神状態でこの作品に臨んだかはこの「附記」で理解できよう。

先にも記したが、この『嵐』では母親のいない

家庭で子供たちが成長し、巣立ちを始める様を父親が暖かい眼で見ている様子が描かれている。にも拘らず、『嵐』という表題がつけられているがこれについて考えてみたい。

この作品の中で「嵐」という単語が表題を除いて五回登場している。先ず最初は兄妹けんかの後である。

「『末ちゃんのお蔭で、僕が父さんに叱られる。』

その時、次郎は子供らしい大聲を揚げて泣き出してしまつた。

私は家の内を見廻した。丁度町では米騒動以來の不思議な沈黙がしばらくあたりを支配した後であつた。市内電車従業員の罷業の時も傳はつて来る頃だ。植木坂の上を通る電車も稀だつた。たまに通る電車は町の空に悲壯な音を立てて、窪い谷の下にあるやうな私の家の四疊半の窓まで物凄く響けて来てゐた。

『家の内も、外も、嵐だ。』

と私は自分に言つた。」(註9)

次が家を変えることを強く意識したときである。

「『子供でも大きくなつたら。』

長いこと待ちに待つたその日が、漸く私のところへやつて来るやうになつた。しかしその日が来る頃には、私はもう動けないやうな人になつてしまふかと思ふほど、そんなに長く坐り續けた自分を子供等の側に見出した。

『強い嵐が来たものだ。』

と私は考へた。」(註10)

この父親が過去を振り返つてみたときにも登場する。

「私は子供等に出して見せた足をしまつて、何氣なく自分の掌を眺めた。いつでも自分の掌を見てみると、自分の顔を見るやうな氣のするのが私の癖だ。忌々しいことばかりが胸に浮んで来た。私はこの四疊半の天井から澤山な蛆の落ちたことを思ひ出した。それが私の机の側へも落ち、疊の上へも落ち、掃いても掃いても落ちて来る音のしたことを思ひ出した。何が腐り爛

れたかと薄氣味悪くなつて、二階の部屋から床板を引きへがして見ると、鼠の死骸が二つまでそこから出て来て、その一つは小さな動物の骸骨でも見るやうに白く曝れてみたことを思ひ出した。私は恐ろしくなつた。何か斯う自分のことを形にあらはして見せつけるやうなものが、しかもそれまで知らずにみた自分の直ぐ頭の上にあつたことを思ひ出した。

その時になつて見ると、過ぐる七年を私は嵐の中に坐りつゞけて来たやうな氣もする。私のからだにあるもので、何一つその痕跡をとどめないものはない。髪はめつくり白くなり、坐り^だ胼胝は豆のやうに堅く、腰は腐つてしまひさうに重かつた。」 (註11)

長男の居る木曾に旅をして帰った後の場面にも使われる。

「しかし、斯ういふ旅疲れも自然とぬけて行つた。そして、そこから私が身を起した頃には、過ぐる七年の間續きに續いて来たやうな寂しい嵐の跡を見直さうとする心を起した。こんな心持は、あの太郎の家を見るまでは私に起らなかつたことだ。」 (註12)

そして最後は次男を木曾に居る長男の元に送り出すときに使われる。

「『大都市は墓地です。人間はそこには生活してゐないのです。』

これは日頃私の胸を往つたり來たりする、あるすぐれた藝術家の言葉だ。あの子供等のよく遊びに行つた島津山の上から、芝麻布方面に連なり續く人家の屋根を望んだ時の曾ての自分の心持をも思ひ合はせ、私はさういふ自分自身の立つ位置さへもが——あの藝術家の言草ではないが、いつの間にか墓地のやうな氣のして來たことを胸に浮べて見た。過ぐる七年のさびしい嵐は、それほど私の生活を行き詰つたものとした。

私が見直さうと思つて來たのも、その墓地だ。そして、その墓地から起き上がる時が、どうやら、自分のやうなものにもやつて來たかのやうに思はれた。その時になつて見ると、『父は父、

子は子』でなく、『自分は自分、子供等は子供等』でもなく、ほんたうに『私達』への道が見えはじめた。」 (註13)

(引用中の傍点は引用者による)

引用した順に1から5の番号を仮に付ける。

1の「嵐」は、「家の内も、外も」とある点から、「外」は社会の様相を示しており、直接的にはストライキとたまに通る電車の騒音であり、沈静化している米騒動も含めて良いだろう。「内」は言うまでもなく家庭内であり、そこには子供たちの喧嘩がある。子供たちに振り回されるかのような父親の生活状態と言えよう。

2の「嵐」について。1の「嵐」の部分よりいっくらか後に次のような一節がある。

「この病弱な私が、兎も角も住居を移さうと思ひ立つまでに漕ぎつけた。私は何か斯う眼に見えないものが群がり起つて來るやうな心持で、本棚がはりに自分の藏書のしまつてある四疊半の押入をもあけて見た。いよいよこの家を去らうと心をきめてからは、押入の中なぞも、まるで物置のやうになつてみた。世界を家とする巡禮者のやうな心であちこちと提げ廻つた古い鞆——その外國の旅の形見が、まだそこに残つてゐた。

『子供でも大きくなつたら。』

私はそればかりを願つて來たやうなものだ。あの愛宕下の宿屋の方で、太郎と次郎の二人だけを側に置いた頃は、まだそれでも自由がきいた。腰巾着付きでも何でも自分の行きたいところへ出掛けられた。末子を引取り、三郎を引取りするうちに、眼には見えなくても降り積^{うづ}る雪のやうな重いものが、次第に深くこの私を埋めた。」 (註14)

つまり、こうである。いつかは家を越そうと考えてはいたが、四人の子供たちと寝起きを共にして生活をしてきた。この子供たちを育てているがために、足に根が生えたかのようになり、他に移ることなど考えもしなかった。だが子供たちがそれぞれ成長して、手狭になったこの借屋から出ることを考えはじめたのである。

「實に些細なことから、私は今の家を住み憂く思ふやうになつたのであるが、その底には、何かしら自分でも動かずにゐられない心の要求に迫られてゐた。七年住んで見れば澤山だ。そんな氣持から、兎角心も落ち着かなかつた。」

(註15)

引っ越しを促すものが「強い嵐」である。

3の「嵐」は、この父親を精神的にも肉体的にも傷つける「忌々しいこと」である。

4の「嵐」には「寂しい」という形容詞がついているが、その「嵐の跡を見直」す氣持になつたのである。そして5の「嵐」も、3の「嵐」と同様である。だが、その「嵐の跡」は、人間の生き生きした生活の場ではなく、「墓地」と思わせることになつた。単に防御の姿勢で難を外敵から守るかのようにして子供をかばつてきた。そこには本来の生活、つまり、積極的に生を生きる姿勢はない。子供たちの自立が始まる今、これまでの生活スタイルは変わるのである。そして父親自身も子供たちをかばうだけの生活から解放され、子供たちと共に自己の生を積極的に生きることを考えたのである。このことが「ほんたうに『私達』への道」なのである。

「嵐」にいくつかの意味が込められているのは今まで辿ってきたことで理解できよう。どの意味の「嵐」をとつても、主人公たる父親に様々に現実的な影響を与えるものである。

「附記」で藤村自身が記すように「精神の動搖」がいやされたのである。姪こま子との関係、さらに告白したことによって生じた「動搖」である。この「動搖」の中であつて、子供たちの父親でありながら、母親の役目をし、成長を見守る中で、つまり、日々の雑事とも言うべきものに時間を費すことで、精神的な破綻をまぬかれたのである。

「時間」がことを解決したとも言えるが、ここでは単にそれだけの意味ではない。この七年間は次の飛躍とまではいかないにしても、作家藤村の人生での新たな飛躍を約束する意味でのエネルギーを貯えた時期と言えまいか。言わば、『新生』によって獲得した精神世界をより深めるために、現実的な様々な事象、つまり「嵐」が必要だったのである。

III-3

日常的な生活の中で「嵐」を全身に受け留めながらも、作家としての藤村が試みたことは童話を書くことであつた。フランスからの帰国一年後に『幼きものに』（大正六年）、大正九年に『ふるさと』、大正十三年に『をさなものがたり』がそれぞれ出版された。昭和十五年には『力餅』を著わし出版している。(註16)しかしこの作品は除外しておきたい。理由は『夜明け前』以後の作品だから。

『新生』の中でフランス滞在中の岸本が日本に残した子供たちのことを思い出す場面がしばしばある。第一次大戦中、戦火を逃れるためにリモージュに滞在したときのことである。岸本は田舎の子供たちと接触する。

『「お出。丁度あなた方と同年ぐらゐな子供を小父さんも國の方に残して置いて來ました。この小父さんはそんなに可憐いものでは有りませんよ。』

斯う岸本は言つて、それから三人の小娘に歌を所望した。バトアと稱へる方言で出來た小唄のあることを彼は宿の主婦からも聞き、小年のエドワアルからも聞いて居た。斯の岸本の所望は歌好きな小娘達を悦ばせた。遠く泉太や繁から離れて來て居る旅の空で、無邪氣な子供の口唇から佛蘭西の田舎の俗謡を聞いた時は、思はず岸本は涙が迫つた。』 (註17)

幼い子供たちを日本に残してきた父親の望郷の思いである。パリに戻つてアベラールとエロイズのことを考えた後に岸本自身が情熱を傾ける人に最早出会うことはないと思ひもする。この後に次のような叙述がある。

「其晩、岸本は遅く部屋の寢臺に上つた。枕に就く前にも、床の上に半ば身を起して居て、若い時分の友達のことや、自分の青年時代のことを思ひ出した。あの早くこの世を去つた青木に別れた時から數へると、やがて二十年近くも餘計に生き延びた自分の生涯を胸に浮べて見た。彼は唯持つて生まれたまゝの幼い心でその日まで動いて來たと考へて居た。氣がついて見ると、

どうやらその心も失はれかけて居た。

『左様だ。何よりも先づ自分は幼い心に立ち歸らねばならない。』

と言つて見た。旅に来てその晩ほど、彼は自分の若かつた日の心持に歸つて行つたことは無かつた。」（註18）

ここに至っては単なる望郷の思いで自らの子供たちを偲んだのではないことは明らかである。生きることの支えとするために「幼い心」に戻ることを必要としたのである。姪との関係は帰国後一年以上も経た後に、これまで論述してきたような結果をみた。だが帰国した時点では、この「幼い心」を得ることが自らの生の支えとなると考えていたとしてよい。そしてその幼きものの視点を獲得するために、童話を書いたと、とりあえずここでは仮定しておく。むろん藤村自身はこの点を明らかにしていない。童話を書くことについては次のようにしている。

「私の童話を書くやうになつた動機は、外國の旅の寂しさから來た。私は遠く自分から離れて居る子供達のためにと思つて、何かの紙のはじめに旅の話でも書きつけて送らうと思ひましたが、巴里にある間はそれも果たせなかつた。あの頃の私はまだそれを一冊の本にまとめて世に公にしようといふ考えすらも持たなかつた。國へ歸つて來て子供達への土産の『幼きものに』が出來た。あゝいふものが人に讀まれるやうに成つたのは、自分ながら不思議なくらゐであるが、あの旅の話を書いて居るうちに私は童話に興味を持つやうに成つて行つた。」（註19）

パリに居る間に、それを果たすことは不可能であつたらう。子供たちのために書くとしても、子供たちと共に居るこま子、さらにはこま子との間に生まれた子供のことさえも思い浮ぶはずであらう。その思いが自分の内面で整理されていない限り、子供たちのためにまとまったものを書く余裕はなかつたらうし、まして「幼い心」についての考えもまとまっていなかつたはずである。

さて帰国後に書いた『幼きものに』は藤村が日本を發つて帰国するまでに知つた外國の種々の童

話や体験したエピソードなどをおりまぜて、帰国後子供たちに語りかける形式で書かれている。

『ふるさと』は『新生』の執筆中に書かれたものや、その後にかかれたものが集められて出版された。内容は、藤村自身が幼い頃木曾で知つたことを中心にしたもので、習俗や生活習慣が描かれている。十歳の藤村が上京の旅に出て、中仙道の沓掛から乗合馬車に乗つたエピソードで終っている。

『をさなものがたり』は『ふるさと』の後を受けて、十歳にして始まつた東京での生活で知つたことがらや創作した童話がおりにまぜられている。

これらの一連の童話は三人の男の子と一人の女の子を対象にして、実は藤村の子供たちであるが、藤村自身の幼い頃から幼年時代までをなぞるようにしながら、様々な教訓を含めて描かれている。果たして藤村はこれらの創作活動を通じて「幼い心」にもどることができたろうか。

藤村が二十九歳のときである。『雲』と題した一文を発表する。その中に次のような部分がある。

「願れば雲に就きて吾心を寄すべき機會少なからざりき。土佐の古畫には殿上の光榮あるさま、貴族の生涯の閑閑さ、狩野派の山水畫には神韻かぎりなきの趣、または佛畫の自在と超逸との意義、これらを示すに古代の畫家が多く用ゐたるも雲なりき。寺院の莊嚴を飾り、靈廟の神聖を飾るがために、むかしより建築、彫刻の上に象りたるものは多くこの雲なりき。織物の意匠、染物の模様、陶器の畫、漆器の蒔繪、數ふれば雲烟が美術家の作品に上りて、常に吾心を引けるもの少なしとは言ひがたし。これを詩文の卷卷にもとむれば、自然の眺に、人事の比喻に、詩人が想像と觀想とを彩るは雲なり。美術家が自然とわれとの間に立ちて、捉へがたき雲烟の趣を見やすき藝術の上に顯し、或は筆に、或は鑿に、教ふるところ多かりしかど、雲の智識に就きて吾心に會得せしことは極めて遅くつたなかりき。山水畫の辨を讀むまでは、われは空を仰ぎつゝおぼろげなる感興に満足したりしなり。當時雲烟は知らざる國の言葉もて綴りなしたる詩歌のごとかりしのみ。われはラスキンの通辯を聞きて、始めて心を雲に傾けぬ。つぎてさまざまの疑問はわが胸中に往きかよひ

たり。樂を學ばむと思へるものが、始めて指を新しき樂器に觸れ、旋律、加絃、長短の旋法などにつき、おのづと心に幼稚なる疑惑を抱くがごとくに、一つはわが思想の單調を破らむと思へる心より、一つは春潮のごとくに湧きくる自然の愛慕より、一つは又た樂し哀しき人の世の謎の解きて解き難き煩熱を醫するの願ひよりして、心は空行く雲烟の限り無きさまに向ひ、近世畫家論の著者が未だくはしくは説き及ばざりし春雲、秋雲、曉雲、暮雲のけじめなどにつき、汲めば汲むほど、味へば味ふほど、言ふべからざる興味の溢れ出づるを覺えぬ。」（註20）

こうして雲の觀察、記録を試みるのである。小諸時代のことである。「この稿（『雲』のこと一引用者註）を草する頃は、すでに千曲川のスケッチを始めかけてゐた。」（註21）その『千曲川のスケッチ』は後に加筆、書き変えなどして出版されたことは周知の事実である。この書の再版の際（昭和十一年）に付け加えられた「奥書」では次のように語られている。

「自分の第四の詩集を出した頃、わたしはもつと事物を正しく見ることを學ぼうと思ひたつた。この心からの要求はかなりはげしかつたので、そのためにわたしは三年近くも黙して暮すやうになり、いつ始めるともなくこんなスケッチを始め、これを手帳に書きつけることを自分の日課のやうにした。」（註22）

藤村は次なる飛躍のために新たなる試みを見出し、実行したのである。そもそも小諸を訪れ、そこに滞在したのも藤村の試みである。『千曲川のスケッチ』の序の部分で言っている。

「『もつと自分を新鮮に、そして簡素にすることはないか。』

これは私が都會の空氣の中から脱け出して、あの山國へ行つた時の心であつた。」（註23）

藤村は思い立ったこと、これぞということを實行するのである。上に記したように詩人から小説家へと轉身するのに用意周到にこゝを運んだので

ある。これらのことから見て、常に藤村がさらに小説家として摸索しながらも、努力と前進を良しとし、心がけ、目指していたのは明らかである。

従つて童話を書くということもこの例外とは言えない。藤村流の考え方で試みたのである。「幼い心」を獲得するために。むろん、この点についての成果は不明であるとしても、試みたことを強調して良いだろう。パリで決意したことを具体的に創作活動の中で試みたのである。（以下次号）
（受理 1988. 8. 9）

註

1) ここに挙げた各短篇小説の初出を次に記す。

『ある女の生涯』 『新潮』 大正10年7月

『子に送る手紙』 『新潮』 大正13年1月

『のび支度』 『新潮』 大正14年1月

『熱海土産』 『女性』 大正14年1月

『嵐』 『改造』 大正15年9月

『分配』 『中央公論』 昭和2年8月

『貧しい理學士』 『太陽』 大正9年4月

『涙』 『解放』 大正9年6月

『三人』 『改造』 大正13年4月

『明日』 『婦人の國』 大正13年5月

『食堂』 『福岡日日新聞』 大正15年12月

21日から翌年1月9日までの13日間におたり連載。

2) 大正11年4月1日付けで創刊号が発刊され翌年1月の第十号で廃刊となった。目指すところは本論で引用した文章で理解できよう。

3) 初出は『處女地・愛讀者募集趣意書』大正11年3月。

『藤村全集第九卷』筑摩書房、昭和53年、P. 539

4) 初出は『太陽』9巻6号、明治36年6月。

5) 初出は『明星』3号、明治36年。

6) 昭和2年1月1日付けで新潮社から出版。

7) 昭和13年9月1日付けで発行された。

8) 『藤村全集第十卷』筑摩書房、昭和53年、P. 520～521

『海へ』は大正6年4月から翌年4月まで6回に渡って分載したものと東京朝日新聞に大正5年9月5日から11月19日まで連載したものが収録されている。實業之日本社から大正7年7月に刊行された。

『寢覺』は、先にも記したが、『新生』の前篇のみをこの題で刊行したことがある。

『エトランゼエ』は大正9年9月25日から翌年1月12日までに82回に渡って連載されたものと大正10年10月から翌11年4月まで10回に渡って連載されたものが収録され、大正11年9月に春陽堂から刊行された。

- 9) 『藤村全集第十巻』筑摩書房、昭和53年、P.10
- 10) 同上、P.24
- 11) 同上、P.26～27
- 12) 同上、P.44
- 13) 同上、P.50～51
- 14) 同上、P.14
- 15) 同上、P.5
- 16) 『幼きものに』は大正6年4月に實業之日本社から刊行された第一童話集。

『ふるさと』も同社から大正9年12月に刊行された第二童話集。

『をさなものがたり』は研究社から大正13年12月に刊行された第三童話集。

『力餅』は著者自編による「藤村童話叢書」の第一篇として昭和15年11月に研究社から出版された。

- 17) 『藤村全集第七巻』筑摩書房、昭和53年、P.191
- 18) 同上、P.234
- 19) 『藤村全集第九巻』筑摩書房、昭和53年、P.108
- 20) 『藤村全集第十巻』筑摩書房、昭和53年、P.253～P.254
- 21) 同上、P.517
- 22) 『藤村全集第五巻』筑摩書房、昭和53年、P.587
- 23) 同上、P.3